

中年期の再発見

奈良女大生活環境

石川 実

平均寿命の長短にかかわらず、「中年」と呼ばれる時期が、人間のライフステージのなかにあることはだれでも知っている。しかし、「子ども期」や「青年期」に対するわれわれの関心の大きさに比べると、「中年期」「老年期」といった人生の半ば過ぎからのライフステージに対する関心度は、かなり低かったといえるだろう。

1960年代以後、人口の高齢化・社会の高齢化が自覚されるにつれて、老年期に対する関心だけは急速に高まってきたが、中年期に対する関心は依然として高揚しなかった。中年期は人生のなかで「もっとも安定した時期」「人生の軌道のほぼ定まった時期」と見なされがちであり、研究者が積極的に関心を払う対象とはなりえなかったからであろう。

しかし、1975年以降顕著になった「少子化」と人口の「高齢化」という二つの社会的傾向の同時進行が社会問題視され始めると、これらの傾向によって生じた、ライフステージ上の「エンプティ・ネスト」期の伸長がクローズアップされることになった。

ここでは、生きがいの問題（役割転換と役割喪失感など）と家族問題（中高年離婚の増加など）を中心にして、人生と家族のもうひとつの転換期としての「中年期」に焦点を当てる。